

弔 辞

京都大学名誉教授故高松英雄先生の御霊前に、謹しんでお悔みの言葉を申し上げます。

先生は、昭和11年3月に満洲医科大学を御卒業になり、その後同大学病理学教室に勤務せられ、昭和16年4月に医学博士の学位を授与されました。終戦により同大学を自然退職され、戦後は福岡県保健所嘱託、横浜市立医学専門学校講師、同教授、横浜医科大学講師を経て、昭和29年4月に京都大学結核研究所助教授に就任されました。同時に病理学部門主任として研究所の発展につくされ、昭和34年3月には教授に昇任、さらに昭和41年4月には御自身の研究成果を基礎として新設された細胞化学研究部門の主任教授に就任され、昭和50年4月停年により退官されました。

この間、先生は20年余にわたって研究所における基礎的研究の発展にたゆまぬ努力を傾けてこられました。

先生は全国で唯一の細胞化学研究部門の設立に尽力されると共に、酵素の組織化学的研究に関しては世界的にその名を知られ、「組織化学の父」と呼ばれているところであります。

また先生は、昭和35年に日本組織細胞化学会を創設され、理事長として学会の発展と研究者の育成に努力されたのであります。

さらに、昭和47年京都で開催された第4回国際組織細胞化学会議では会長に選ばれ、その企画ならびに運営に示された卓越した識見と綿密な配慮は世界各国の専門家から最高のものと評価され、大きな成果を収めたことは未だ記憶に新しいことであります。

先生のお人柄は平静で温厚であり、学問に対する激しい情熱を常に内に燃し続けてこられました。

これまで先生が組織化学、細胞化学の領域の進歩と、研究所の発展とに極めて重要な貢献をなされてこられた御功績をしのび、研究所を代表して謹んで哀悼の意を表します。

先生、何卒安らかに眠り下さい。

昭和54年11月8日

京都大学結核胸部疾患研究所

所 長 前 川 暢 夫

〔附 記〕

高松英雄先生が突然に下血を来して、京都大学医学部内科第一講座内野治人教授の診察を受けられ、胸部レントゲン像上右肺下野に異常陰影を発見されたのは、昭和54年4月のことであった。直に私共の診療科で検査を行った結果は、私共の最も恐れていたものであった。それから遂に不幸な転帰を見るまでの約7カ月間、先生の学会、研究資料及び身のすべてにわたって整理に当られた超人的な気力は誠に驚異的なものであった。私共は現代の医学の無力を痛感するばかりであったが、先生が一言も苦痛を洩らされない御姿は医療にあたるすべての者のひとしく感銘を深くした点であった。

所感を附して心から御冥福を祈る。

(前川記)